津田昇平教話　第十七話

令和三年一月十七日　朝の教話

おかげとは氏子のめいめいの真に映る影のこ
とじゃから、神様に大きな真を向けて見よ。

おはようございます。令和三年一月十七日をお迎えさせて頂きました。

神様のおかげを頂くために、どのような信心をさせて頂いたらよいのか。まあいろんな言い方はあるなと思います。その中の一つに、教祖様が仰ってる中でも、こういう信心したらよいというのは、「真（まこと）」というものを神様に供えるんだということですね。自分の中の真。まあ、真心（まごころ）っていうのは目に見えない心ですね。心ですから。それを姿に表していくのを、私はよく「真姿（ますがた）」って言います。形に表していくということ。心が形になっていく。真心というものと、真姿っていうのがあります。その目に見えないものを目に表していくということ。そこに真というもの

が供えられるということも、とても多いなぁと思います。心も大事ですし、それが形になって姿に表れて、目に見える中で出てくるということ。これもすごく大事なことやなぁ。それを神様に向けていくということがありますね。

教えの中で、

広大なおかげ、広大なおかげと言うが、おかげとは氏子（うじこ）のめいめいの真（まこと）に映る影（かげ）のことじゃから、神様に大きな真を向けてみよ、大きなおかげがわが身にいただける。小さな真では大きなおかげはもらえぬぞ。影は形にそう

と決まったものじゃ。

【理Ⅲ　尋求教語録（じんきゅうきょうごろく）　二（一）】

というご理解がありますね。「広大なおかげを、大きな大きなおかげを、どうぞお授け下さい」って人間は願うものですけれども、まあそう言うけれども、おかげというのはそもそも、私たち人間が、氏子（うじこ）が、それぞれに神様に「真（まこと）に映る影」、「供えた真に映る影じゃから」、影とはそういうものですね。「おかげ」って漢字で書きましたらね、まあ光に対する「影」ですね。この漢字をだいたい書きますね。神様に大きな真を向けてみたら、大きなおかげがわが身に頂ける。これどういうことか言いましたら、

影っていうのはお天道(てんどう)様がお照らし下さったら必ず影ができる。照明の下に行っても影ができる。これを漢字で書くと「影」なんですよね。御影(みかげ)っていう言葉も、例えば神戸にも御影(みかげ)っていうところがありますね。「御(おん)」「影(かげ)」と書きまして、それで「御影」って言いますけど、「難(なん)はみかげ」の「御影」もおんなじような漢字ですね。

そもそも、神様に真を供える。そうすると、神様の方から光が出てますね。そうすると、太陽にでもそうですけれども、例えば手をかざす。そしたら、手の影はどこに映るかって言ったら、自分にくるわけですね。これを仰ってるわけです。神様に供えるということは、神様は金光教で

いう「金光（こんこう）」ですね。金光というのはですね、教祖様が明治十六年にお亡くなりになりましたね。明治十六年の十月十日。その年の一月の十六日。昨日になりますね。こういうふうにして残されてる。

これは金光萩雄（こんこうはぎお）さんっていう、（教祖様の）四男さんですね。

今日は、金光（こんこう）という名について話して聞かそう。金光とは、金光（きんひか）るということである。金（きん）は金乃神（かねのかみ）の金、光は天（あま）っ日の光である。

【理Ⅱ　金光萩雄（こんこうはぎお）　二一より抜粋】

「天地金乃神様（てんちかねのかみ）」っていうのが神様のお名前ですから、金光る（きんひか）、金光（こんこう）の金光（きんひか）るというのは、「金（きん）」というのは天地金乃神様の「金乃神」というところから「金」が一文字あると。で、金光（こんこう）の、金光（きんひか）るの「光」というのは、天地金乃神様は天地そのものですね。なかんずく、天（あま）つ日の光である。天つ日というのは「天（てん）」ですね。天つ日の光である。

天（あま）つ日の光があれば明るい。世界中へ金乃神の光を光らせておかげを受けさせるということである。

【同】

「世界中に金乃神（かねのかみ）の光を光らせて」、神様の光ですね。「光らせる」って書いてますね。そして「おかげを受けさせる」これも考えてみたら、神様の方から光が放たれるということであって、そうすると光に当てられたものっていうのは影ができる。で、私が例えば神様に向かっていく時に、先ほども言いましたが、神様は光ですから、光のある方に手を伸ばしたら、私の手に光が当たって影が私にくるわけですね。これは道理（どうり）じゃないですか。

そうすると、真（まこと）を供えるということは、神様に真を差し出すと、神様の光と真と私とが、一直線上になるわけですね。光に向かって私が真を供えたら、光に照らされて、真の影っていうのは私にくるわけです。こ

のことを「おかげ」というわけですね。

「天つ日の光」ってありますね。神前拝詞(しんぜんはいし)に、「畏(かしこ)しや　天つ日(あまひ)の輝(かがや)き大地(おおつち)の育み」ってあると思います。「天つ日の輝き」、これは天ですね。「大地」、大きな地です。「大地の育み」、天つ日の光があってこそまた、大地(おおつち)（大地(だいち)）が育まれていく。そらそうですね。

これが天地金乃神(てんちかねのかみ)様のお体そのものなわけですけれども、この「金光(きんひか)る」というのが、とりわけ天の光ということを非常に仰っておられる。金乃神というのは「地」になりますけれども。そう考えましたら、教祖様がみ教えの中で仰ってますけど、「おかげとは氏子(うじこ)のめいめいの真に映る影。だから、神様に大きな真(まこと)を向けてみなさい」と。神様ってどんな神

様？　光を放つ神様ですね。その光に向かって、神様に向かって、大きな真を供えたら、その大きな真に照らされて影ができる。それは当然、私（わたくし）という、供えてる人の方に影ができるわけです。

じゃあ、大きな真には大きな影ができるし、小さな真であれば影は小さくなる。「影は形にそうと決まったものである」というふうに仰る。いやぁ、それはそうですね。まあ大きな木と小さな木とが並んでたとしましょう。じゃあ、日の光に当たったら大きな木に映る影と、すぐその隣にある小さな木に映る影とでは、当然影も違いますね。これは天地（てんち）の道理（どうり）です。大きな木は大きな影、小さな木には小さな影。小さな木で大きな影のような影を作るということは、これできないわけですね。だから、

「大きな影を下さい」と、「広大なおかげ、広大なおかげを下さい」と言うけれども、そもそも影というのは、あなたたちが神様の方に向かって差し出した、供えたその真の大きさによって決まるものやから、大きなおかげというものが欲しかったら、まず大きな真というものを神様に差し出しなさい、と。でなければ、神様のおかげというのは、大きなおかげというのは頂こうと思っても、そら頂けない。だから大きなおかげが欲しかったら、真を大きくしなさいということを仰ってるんですね。

違う例えで、私はまあよく言うんですけれども、親切なおばあちゃんがおったと。おばあちゃんはお菓子作りが上手やと。時間を見つけてお

やつでも、まあクッキーでも焼いてあげようと。でも、「材料だけ持って来てね」って言われてた。子どもたちは材料を持っていく。これだけの材料、クッキーの材料を持っていったらおばあちゃんが「作ってあげる」って、作ってくれる。じゃあ十個の材料、クッキー十個を作るだけの材料をおばあちゃんに持っていったら、その十個の材料でおばあちゃんはせっせと作って下さって、上手に焼いて下さって。で、十個のクッキーができる。道理（どうり）ですね。じゃあ、三個のクッキーの材料を持っていったら、三個のクッキーができる。これも道理ですね。

じゃ、三個のクッキーの材料で、「これで十個作って」って言ったらどうなるか。こら無理ですね。材料が足りないわけです。で、自分が欲しい

おかげというのはそもそも、一体どれぐらいの大きさの、分量の、沢山のおかげ、大きなおかげを欲しいのか。で、それに見合うだけの真（まこと）、材料ですね。おかげの材料ですから、真は。それをちゃあんと、おばあちゃんに渡しとるんか。もっと言うたら、神様にお渡ししてるんか。それだけのおかげの材料である真を神様にちゃんと供えているんか、というところが問題なんですね。それは私たちの問題であって、神様の方の問題ではありません。だから私たちが神様への真というものをしっかりとお供えせんといかんわけです。

ここまでおかげの材料は真（まこと）というふうな話をしましたけど、じゃ、真

っていうのは、そもそもなんやろうか？　って話になってくると、一言で言いましたら「神様への一筋（ひとすじ）さ」、「真っ直ぐさ」と言っていいと思います。

私という一人の氏子（うじこ）がおったとしましょう。神様のおかげを頂きたい。私がですね、近所に住んでて、お参りをしようと。週に一回お参りする私と、毎日お参りする私と、月にいっぺん参る私と、年に一回参る私と、私が四人おったとしましょう。じゃあ、理屈の話として、年に一回参る私、月に一回参る私、週に一回、毎日。おんなじ距離ですよ。私の場合ね。距離によって違ってきますから。でも、おんなじところに住んでて、そこからもうすぐお参りができる。それこそ徒歩十秒とか。もうすぐに

お参りできる。そんな距離やったとしましょう。そうするとね、誰が一番、神様に真をたくさん供えられるか。「よーいドン」でやった時にこれ、全然違ってくるわけです。一年間でレースしましょう。津田昇平（つだしょうへい）くん、A、B、C、Dでやった時にね。じゃあ、Aの昇平くんは一年に一回参った。Bの昇平くんは月に一回参った。Cの昇平くんは週一回。Dの昇平くんは毎日。そしたら、Aの昇平くんは、まあ一個です、真は。Bの昇平くんは真が十二個あります。Cの昇平くんは真が六十個やったとしましょう。昇平くんDは毎日になりますから、そうすると三百六十五個の真になるわけです。

そしたら、さっきのおばあちゃんの話やないけれども、神様にそんだ

けの真を供えたら、それで材料がそろったわけですね。神様はどれだけのおかげを作れるかってなったら、真一個やったら一個のおかげになるし、十二個やったら、十二個。で、六十個やったら、六十個。三百六十五個やったら、三百六十五個。つまり、材料に合わせておかげというのはできるということですね。一回参るのと、二回参るのと、三回参るのやったら、参った方が真が大きいんです。それだけ、私なりの真が大きくなるわけですから。

で、例えばですよ。おんなじふうにして、お参りしてご祈念するにしても、一人の私はお広前でパパパッ、パパパッて柏手(かしわで)を打って、まあ一

分くらいで終わったとしましょう。もう一人の私は、そこでじっくりと、二十分、五十分、一時間、二時間とご祈念したとしましょう。どっちの方が真が大きいかって考えたらこれ、長くご祈念してる私の方が、真が大きいわけです。

お仕事したら分かると思います。時給とかってありますでしょ。時給何百円とかってありますよね。週に何回入りますか？　週に一回入れる私と、週に五回入れる私やったら、五倍違いますね。じゃあ、おんなじ週に五回入れる私でも、週に五回やけれども一日一時間だけ入れますっていう私と、八時間入れますという私と、これでもまあ八倍違いますね。……って考えたら、週に一回だけ一時間、もし入るとしたらですよ。じ

ゃあこれでまあ四週ですから、四時間入ったっていう、四時間分のお給料もらえますね。じゃあ私が週に五回、八時間入ったらって、これまあ四十時間入ってることになります。これだけで全然、もらうお手当は違いますでしょ。全然違ってきますね。

これとおんなじことが言えます。真というのは、あくまでも材料なんです。で、おかげが欲しければ、大きなおかげが欲しければ、神様に供えるんですけれども、その真が大きい方がおかげは頂けます。それは材料になりますから。だから毎回、言うたらおんなじところに住んでるんであれば、参ったら参っただけのおかげは頂けるっていうのもこれも本当だし、パパパッ、パパパッていうふうにして、カラスの行水（ぎょうずい）みたいに、

もうアッという間に出てきてしまうようなね、そういうふうなお参りよりは、できたらじっくりとお参りができるんであれば、した方がいいですよね。でも忙しい時はもちろんあります。それはそれで、そん時そん時の都合に合わしていったらいいんですよ。職場、学校に行くから、ちょっとお参りして行かしてもらう、それはそれで結構なんです。でもまあ、いつもいつもじゃ、それがいいと思いませんのんで、時にやっぱりじっくりと、ゆっくりとご祈念をさせて頂く、お礼申し上げる、自分を見つめる。そういう時間は大事やと思います。でもそれに応じて、やっぱり真は違うんですよ。

で、もう一個言いましたらね、例えば私が尼崎市内に住んでるのと、東京に住んでる私とであったとしましょう。じゃ、一回のお参りでどうなるかって言ったら、そら遠くからわざわざ参る方がそら、真(まこと)が大きいんです、これ。全然違いますよ、やっぱりね。だって私、市内に住んで、すぐ隣に住んでたら、もうすぐ参れるんですもん。手間暇(てまひま)かかってるかっていったら、そんなかかってないですわね。でも例えば、東京から参るとか、遠くから参るようになってきたら、これは違います。参るのに仕事も休まんといかんでしょうし、時間も繰り合わせんといかんし、交通費だってお金かかるし、その手間暇がありますよね。電車に乗ったり、場合によったらバスに乗ったり、タクシーに乗ったり。で、ゆっくり

お参りしようと思って、ホテルで一泊して帰る。これだけでもすごい時間もかかるし、お金もかかる。そうすると一度のお参りと思っても、すぐパッと来てパッと帰るというのとは、やっぱ違うわけです。それだけで真は違いますね。真の大きさは全然違ってきます。だからおんなじ一回でも、同じ私ですよ、おんなじ私であったとしても、近所の私が参るのと、東京に住んでる私やったら、全然これ違ってくるわけです、供える真が。だから頂けるおかげも違いますね。

これは二代金光様やったかな。神様のおかげを頂こうと思ったら、よくお参りした方がいいですよね。そのために、近くの人はですね、井戸の釣瓶(つるべ)で水を汲(く)むがごとく、遠方の人は大八車(だいはちぐるま)に積んで、おかげを、神

様のお徳を持って帰りなさいっていう、そういう教えがありますね。

近所の人は、まあ井戸ですね。井戸に釣瓶、釣瓶って分かりますかね。釣瓶っていうのは桶(おけ)ですね。するするするっと降ろして、お水のあるところまで降ろして、ほんでお水を汲んで、そして持ち上げてくる。ま、入る分量は決まってるんですよ。一日生活する上で、お水は当然必要ですから、何回も汲まんといかんわけです、井戸水をね。それを汲んで持ち帰って、それを繰り返して生活していかれるわけですよね。これ何回も何回も通わんといかんということになってくる、井戸に。じゃそれで一杯、汲める水の分量は決まってます。だからまあ、何度も足しげく通って、そして神様のおかげを持って帰りなさいと。これ、お参りのこと言

うてるんですね。

で、遠方の人は大八車。大八車っていうのは、まあ今見ることはないとは思いますけれど、家財道具一切合切（いっさいがっさい）載せて引っ越ししましょうかというそういう時には、載せてよいしょっと、まあ一人で運べるもんかどうか分かりませんけれど、とにかく大きな荷物を運べるような、そういう荷台ですね。当然、釣瓶一杯分というわけじゃないでしょう。たくさんの物も載ります。で、それを遠方の人は持って帰りなさい。一度参るんでもバケツ、桶一杯分と、大八車一杯分やったら、まあ当然違ってくるわけですね。それを、遠方の人は大八車、近くの人は井戸で釣瓶で、井戸の釣瓶で水を汲むがごとくというふうにして、二代様（二代金光様）

は仰った。ま、それだけ近い、遠いということもやっぱり違うんですよね。

その代わり、遠くの人がそんなにしょっちゅう、しょっちゅう、毎日参りたいと思っても、参れないんです。でも、近くの人は参れます。参れるけれども、一回のお参りというのは遠方の人の一回のお参りと同じというわけにはいきません。だからその分、よく参るということが大事になってくる。ま、そういうことですね。それだけ神様に一筋（ひとすじ）さというものが伝わってくるわけですね。だから信心する人っていうのは、できるだけ参拝してもらった方がいいし、ご祈念させてもらった方がいいし、もう一つ、お取次（とりつぎ）頂くのもそうですね。時々頂くのと、よく頂くのとで

も、やっぱり違ってくるでしょう。

神様のおかげを頂こうと思ったら、真(まこと)を供えるということ。その真は、私たち人間の神様に向かう一筋(ひとすじ)さで決まってくるということ。これは、ものすごく大切なところです。これはどんなことでも考えようがありますんで、今、自分が神様に向かっていくという時に、ちょっとだけご祈念するんか、たくさんご祈念するんか。あるいは深くご祈念するんか、浅くするんか。これも大事なとこですね。むしろそっちの方がいよいよ大事かもしれません。短い一分の時間でも、心がほんとに深ーく意識が深ーく心が真っ直ぐに神様に向かって深いところからのお礼やら、お願

いができたら、そしたら浅く一時間二時間ご祈念するよりも、はるかに大きな真を供えることができます。それは心がこもってるからですね、そういうこともあります。なので、まあ単純に計算することができるわけじゃないですけれども、でもだいたいのことを言ったら、ま、少ないより多い、浅いより深い方が、真は大きくなるということです。

で、その真を材料にして、神様は私たちにおかげを作って、授けて下さいます。だから真というのは大事なんですね。しっかりと真を供えられるように、今日は今日で一日、神様に心を向ける、神様と一緒に過ごさして頂く。朝起きたら神様に「おはようございます。夜の間もお守り頂いてありがとうございました」、これで真を供えられてますでしょ。で、

食事を頂く時でも「あぁ、神様ありがとうございます」お料理することができるんやったら火ぃつけて、「ありがとうございます。お鍋のお世話にもなって、食材のお世話になって、まあ何から何までご用意して下さって、勿体(もったい)ないことで、ありがとうございます」で、頂くことができて、頂いたら頂いたで「ありがとうございました」。「しっかり頂いたものが命となって、神様のおかげをよう私が忘れんように、お礼を忘れんようにして今日も一日過ごさして下さい」、これでまた真を供える。「神様、今から仕事に行ってきます。どうぞよろしくお願いいたします。家族のことお守り下さい」。で、「神様、今から自転車乗らせてもらいます。ありがとうございます」。自転車乗り終えました。「ありがとうございました。

電車乗ります。お世話になります。ありがとうございます」電車降りました。「電車さん、ありがとう。神様ありがとうございました」歩いて無事に職場に着いた。着替えることができた。「あぁ、ありがとうございます。今から仕事始まります。今日も一日お守り下さい」。仕事が休憩(きゅうけい)になった。「あぁ、またここまでありがとうございました」。仕事中に電話かかってきました。営業先からです。「神様お願いします」。無事に終わりました。「ありがとうございました。受注が決まりました。神様ありがとうございます」。休憩時間になりました。「ここまで仕事さしてもらいました。ありがとうございました」。妻から電話かかってきました。「子どもが少し熱出て、学校に迎えに来て下さい」と。「あぁ、ここまで元気

に過ごさして頂いてありがとうございます。どうぞまた回復のおかげ頂きますように」……っていうふうにして考えたらこれ、ずーっと祈らしてもらいますね。祈りながら生活。生活の中に祈りがこもってる。で、この一回一回の祈りに全部真を供えてるわけですね。で、その真をしっかり供えといたほうが、神様はおかげを授けやすいですから。だから、いつでも、どこでも、何をしてても、祈ることはできます。神様とお話をするようにしたらよいですからね。神様にお礼申して、お断り申して、そして、お願い申し上げながらご祈念さしてもらう。その時その時、手を合わさしてもらう。人前で何も柏手(かしわで)打てとは言いません。心の中で、「あぁ、神様ありがとうございます」と申し上げたら、それで届きますから。

また仕事の帰りにはお参りをさして頂いて、「ありがとうございました」ってできたら、そら近くの人やったら、それはできますでしょうね。

そうやって、お参りであったり、ご祈念であったり、何も端から端まで完璧にせえなんて言ってるんじゃなくって、自分なりで結構ですから、自分なりに神様と自分との関係を築いてってもらいたいなぁと。とはいっても、自分なりとは言っても、段々とそれが大きくあるいは深くなっていくということは大事ですね。おんなじようにお参りでも、お礼の心が深くなってくるとかね。いよいよほんとにありがたいなぁって。最初の頃はよく分からんかった、苦しいばっかりやったけど、でも、ほんと

におかげ頂いてありがたいなぁって、嬉(うれ)し涙が流れてね、咽(むせ)ぶような、そうなったら一言の「ありがとうございます」でも、全然違うでしょうねぇ。そら神様に供えられるその一言でも、大きな大きな真(まこと)を供えてることになると思います。

そういうわけですから、今日は今日一日、神様のおかげを頂くために信心するんですけど、その信心でおかげを頂くためには、真(まこと)は大事です。じゃあその時、その都度、いつでもどこでも何をしてても、心を神様に向ける。お礼申し上げて、お詫(わ)び申し上げて、お願い申し上げて、神様と一緒に生きていく。神様神様言いながら、神様神様言うてたら、それだ

けで真を供えることになりますから、信心はみやすいもんです。難しいもんでもありません。神様と仲良うしてたらそれでいいです。「神様、神様」というふうにして、お話ししながら、今日一日もお守り頂いて、おかげを頂いて下さい。

よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第十七話

令和三年一月十七日　朝の教話

令和四年十二月五日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五